

1 研究主題

(1) 研究主題

「自然に親しみ、豊かな学びを創る子どもの育成」

(2) 研究主題について

現代は知識基盤社会であると言われている。知識や技術は日々新しくなり、絶え間なく変化している。私たちはその社会で生き抜いていく力を子どもたちに身に付けさせなければならない。そのためには、身に付けた知識をもとに柔軟な思考力に基づく判断ができる力を育むことが必要である。

そこで理科の学習において、これからの子どもたちが身に付けるべきことは、覚えることを主とする記憶中心の知識ではなく、自分たちの思考を通して形成されるより深い知識や理解である。言い換えれば、理科の学習を通して行われる科学的な概念の形成がより重要となる。そしてその獲得・形成された科学的な概念を活用しながら、新たな問題解決に取り組んだり、実生活に適用させたりすることが求められる。そのためには、思考力・判断力・表現力を身に付けることが必要であり、問題解決の活動をより一層充実させなければならない。

これまで本研究会では、授業を通して子どもたちが思考力・判断力・表現力を身に付けるために問題解決の活動を重視してきた。そこでは、子どもたちが主体的に問題解決を行う姿が大切にされており、子どもを中心にした授業の展開がなされてきた。これまでの研究成果をもとに子どもたちが主体的に行う問題解決を更に充実させられるよう本主題を設定した。

(3) 具体的な手立て

専門部会は系統的なつながりを、学年部会はその学年で大切にされる問題解決の資質や能力を切り口にして研究を進めてきた。これまでの研究で特に重視されていたのは、子どもが「学びを創る」ということである。そのための教師の支援として、いかにわかりやすく子どもたちに伝えるか、何を問題にすることで子どもたちが意欲的に問題解決を行うことができるのかなどを視点として授業づくりが行われてきた。

これまでの成果や課題をふまえ、これからの研究においても子どもたち自身が自ら学びを創る授業を主眼に、教材の選択や開発、単元の構想を行うようにする。専門部会は教材性や系統性について、学年部会は子どもの学びを中心に取り組むようにする。そして、授業の中で子どもがどう取り組んだのか、どう変わったのか、子どもの姿で研究の成果を伝えられるようにする。

①「自然に親しみ」について

単に、自然に触れたり、慣れ親しんだりすることではない。子どもが関心や意欲をもって、自然にかかわりながら問題解決していくことである。理科における問題解決は、常に自然の事物・現象をもとにしていること、自然の事物・現象に対する見方や考え方が授業を通して日々修正されていくことを重視している。そこで、子どもたちの実生活で出合う自然の事物・現象をもとにし、そこから乖離することなく予想や考察が行われることを大切にしながら授業づくりを行う。

②「豊かな学びを創る」について

問題解決の過程に沿って子どもたちが自ら学びを創っていくことである。「学びを創る」ことについては、これまでの研究でも「豊かな自然観」や「子どもの良さや可能性」として大切にしてきた。子どもの学びを中心においた問題解決を行うには、単元の導入や終末をどうすべきか、一つひとつの問題のつながりをどのようにもたせるかなど、各部会の専門性を大切にしながら単元全体を視野に入れた授業の工夫改善を行う。

③「体験活動」と「言語活動」について

問題解決のステップのなかで、「問題を見出す」「実験・観察」では体験活動が、「予想や仮説」「考察」「結論の導出」では言語活動が中心となる。問題解決の過程で、それぞれの活動を充実させていくことが、子どもが自然に親しむことや、自ら学びを創ることにつながると考える。よって、問題解決の充実を体験活動、言語活動の両面から考えていくようにする。